
初恋のはじまり

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋のはじまり

【Zコード】

N7141Y

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

恋だ愛だがわからないあのころ。

急に誰が好きかだなんて聞かれても意味もわからなかつた。周りに馬鹿にされるから本当のことも言われなかつた。あれから何年か経つて同窓会が開かれた。

櫻井 たけし
丈志。

それが彼の名前。

あれは小学校高学年だった。

私は上手に友達づきあいができる子供で、いつも教室で一人きりだった。

というか、私の言動に誰もついてこれなかつたのが本当のところ

で。

女らしくない女。

男女。

物おじしない奴。

それが私のクラスでの評価だった。

ある日、『あやあぎやあと騒がしい』クラスに耐えられずに、教室の真横にある屋上に続く階段に座つて小説を読んでいたら、クラスの派手な女の子たちが何やら含み笑いをしながら私に向かつて話しかけてきた。

こんなことは滅多にない。

この子たちはクラスの人間を誰でも友人だと勘違いしている節があつて、クラスで浮きまくつている私も友達と思い込んでいた。そして自分たちの思い通りに友達を操れると考えていた。はた迷惑な話だ。

「ねえねえ、『ぼこだ』」

『ぼこだ』というのは私に対するこの子がつけたあだ名だ。
名字の奥田からきているそうだけど、何をどういじくつたら『ぼこだ』になるのかまったくもつて判らない。

「何？」

「ほこだつてさー、誰が好きなの？」
はあ？ いつたい何を言つている？

呆れて相手を見てみると、彼女の後ろに控えていた数人の女の子もそわそわとして私の答えを待つていた。

「……別にいないけど？」

「えーっ！ そんなのおかしいよー！」

何がおかしい？

別に好きな子がいようがいまいがあんたには関係ないでしちゃうが。
「クラスのみんなに聞いて回つてんだよー？みんないるのにほこ
ただけいないなんておかしいじゃん！」

「みんながいるから私もいるって考えてるほうがあかしいと思つ
けどね」

ひびーい、きつーいと後ろの女の子たちが騒ぐ。

目の前にいる子もぎりっと唇を噛んで私を睨んでくるし。

恥をかかされるとでも思つてるのかな。

でも私にしてみたらそんなことを聞くほうがあかしいと思つけど。

この子たちの考へてることなんてさっぱりわからないのが現状だ。

「……じゃあさ。誰か付き合いややすい子つている？」

ああ、それなら

「櫻井、かな？ 櫻井はいい奴だし」

「へええ。櫻井くんかあ」

なにやらしたり顔でうなづくと、今度は後ろに控えてる子たちと
こそそと相談をして「じゃあ」と笑いながら教室に戻つて行つた。

わけがわからない。

それが彼女たちに対する評価だつた。

一瞬だけそのことを考えると、馬鹿らしくなつて、膝の上に乗せ
たままの小説の続きを読み始めた。

昼休みの、少しだけ長い休み時間が終わつて教室に戻ると、なに

やら私をちらちらと見ながらくすくすと笑っている女の子たちの集団があちこちで見られた。

男子は男子で私と田線を合わそうともしないし。
ちょっとだけ不愉快に眉をひそめたけれど、いつもの無関心を装つて席についた。

机の上には折りたたまれた紙が一枚。

意味がわからずその紙を広げてみると

『ほこだは櫻井が好き』

ハートマークや音符などの絵文字が小さく丸い文字を必要に飾り立てていた。

なぜこんなことをする必要があるのか？理解できない。

それでもこんなことをしたであらう当人を探して教室内を見回しても、誰も私を見ようともしないし、逆に私を大声で囁かしたててあざ笑う。

馬鹿らしそぎる。

手に持った紙を握りつぶしてそのままゴミ箱に捨てに行こうとしたら、目の前に櫻井が立っていた。その手には私が握りつぶしたもののと同じ紙。

「奥田、これ」

「あー。うん。」めん

いや別に私が謝る必要はないと思うけれども、でも櫻井に迷惑をかけたのは間違いないと思うからとりあえず謝った。

さつきまでうるさかった教室内がしんと静まり返る。
そして嫌になるほど緊張感が場を支配した。

「お前の字じやないよ、な？」

「まあねえ。私ならそんな絵文字使わないよ

「そうだよな」

その言葉と同時にくしゃりと紙を握りつぶして、櫻井はごみ箱に

ぽいとソレを投げ捨てた。

続いて私も櫻井にならう。

ざわざわと、教室内にざわめきがゆっくりと戻ってきて、つまらないといつ声がそこかしこに聞こえてくる。

うんざりする。

どうしてそんなことに労力を使いたがるのか理解しがたい。けれども、櫻井とはこれ以降卒業するまで話す機会を得られなかつた。

彼女たちの噂話のネタ提供者にはなりたくなかつたのが本音だつた。

うちの小学校の生徒は、そのまま全員が同じ中学校に持ち上がるわけじゃない。

学校側が任意で越境入学を認めているせいがある。

それは小学校区が異常なほど広くて、隣の中学校だつたら10分で通えるのに自分の学区の中学校なら自転車通学やバス通学をしなければならないからだ。

そんな理由で櫻井と彼女たちは別の中学に通うことになつた。

最後の登校である卒業式の日に、櫻井から告白された。

「お前のことが好きだつた」

「うん。私も好きだつたよ」

ただ、一人ともそれは恋愛などではなく、友達としての好きなんだということが分かつていて。

だからこそ、クラスのうわさ好きで人を陥れるのが大好きな女子たちの餌食にはなりたくはなかつた。

「元気で」

それが最後の言葉だつた。

「懐かしいな」

屋上に続く階段の踊り場で、櫻井はそう呟いた。

「懐かしいね」

あの当時は同じような身長だったのに、今では頭一つ分の差がでてしまった。

高校に入つてしばらくな。

廊下ですれ違つたけばばしく飾り立てた子が声をかけてきた。

「あれ？ ぽこだ？」

『ぽこだ』という言葉には不愉快な思いしかなかつたが、やはしその思いは正しかつたのだろう、声をかけてきたのは六年生の時のあのクラスメイトの女の子だつた。

「ああ。久しぶり」

「うわあ。ぽこだはかわんないねえ。相変わらずだね」

「そつちこそ、変わらないね」

思わず苦笑してしまう。

あの時の女の子はあの時のままの性格である時のまま成長をしていないようだつた。

「今度さ、同窓会するんだよ。ぽこだもきなよ」

確かに同窓会のはがきを受け取つていたが、この子から上から田線で言われる覚えはないんだが。

そんな風に思つていると「きっとだよ」と言つて嘘偽とともに去つて行つた。

やはりあいかわらず自分勝手な女の子だつた。

もちろん同窓会には行く予定だつた。

それは同窓会の往復ハガキの隅に書かれていた言葉のせいだ。

『久しぶり。必ず来てほしい』

幹事である櫻井からのメッセージ。

そうして今わたしと櫻井は六年生のときに使つていた教室の真横にある階段の踊り場にたたずんでいる。

背中には窓から差し込む夕日の温かさがじんわりと感じられる。

頭一つ分大きくなつた櫻井は、あの頃の面影もあまりなく、男らしく成長した。

けれどもやはり櫻井は櫻井で。

同窓会が始まって、幹事として忙しく動き回っていたが、私の横を通り過ぎる時にすつと手の中に紙を握られた。

あのときの、くしゃくしゃにした紙

どきりとした。

思わず櫻井を見ると、まるで何事もないように他の子に話しかけていた。

同窓会がお開きになつて後に階段に向かうと、そこには先客がすでに座つていた。

櫻井。

「待つてた」

「うん」

「好きだ」

「うん」

さきほど渡された紙と一緒に、私が自分で書いた紙を櫻井に渡した。

『奥田は櫻井が好き』

「……知つてる」

「そだね」

階段に座つている櫻井に手を差し出して、踊り場に連れていく。

「ずっとこの上で座つてた」

「私はこの下で本を読んでたよ」

お互いの存在を階段を通して知つていた。

そしていろんなことをみんなに聞こえないほど声で話したね。恋じやないつて思つてた。

彼女たちのいう『好き』じゃないつて思つてた。

それが離れていた三年間で間違ひだつて気がついた。

まさか同じことを櫻井も思つていたなんて思わなかつたよ。

櫻井が私の手を取った。
私はその手を握り返した。

そして一人で歩いて帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7141y/>

初恋のはじまり

2011年11月21日12時06分発行